

<研究ノート>

モンゴル語文法研究ノート(4)
—モンゴル語における情報構造の標示要素の研究：日本語との対照を通じて—
Some notes on Mongolian grammar 4
-A Study of Information Structure Marking Elements in Mongolian: A Comparison with Japanese-

風間 伸次郎
Shinjiro Kazama

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies

要旨：日本語の情報構造において、ハは主題や対比を表すが、これに対し主語が焦点である場合や文焦点である場合、さらに排他にはガが用いられる。一方モンゴル語では主語は基本的に何もついていない名詞によって示される。したがって日本語におけるハとガの違い、つまり文における情報構造の違いをどうやって処理しているかが問題となる。他方、モンゴル語には *n'*, *bol*, *č*, *čin'* という情報構造の標示要素のあることが知られているが、これらは情報構造を示すのにどのように役立っているのだろうか。それらの使い分けの基準は何だろうか。本稿ではこのような問題を解明することを目的とする。

Abstract: In the information structure of Japanese, “wa” denotes topic or contrast, whereas “ga” is used when the subject is a focus, a sentence focus, or for exclusivity. In Mongolian, on the other hand, the subject is basically indicated by the noun without any suffixes. Therefore, the problem is how to handle the difference in Mongolian between “wa” and “ga” in Japanese, i.e., the difference in information structure in a sentence. On the other hand, it is well known that Mongolian has the information structure markers *n'*, *bol*, *č*, and *čin'*, but how do they serve to indicate the information structure? What are the criteria for their use? This paper aims to elucidate these questions.

DOI: <https://doi.org/10.15026/0002000369>

キーワード： ハルハ・モンゴル語, 情報構造, 主題, 小辞, 聞き出し

Keywords: Khalkha Mongolian, information structure, topic, particle, elicitation

1. はじめに

日本語の情報構造において、ハは主題や対比を表すが、これに対し主語が焦点である場合や文焦点である場合、さらに排他にはガが用いられる。一方、ハルハ・モンゴル語（以下単にモンゴル語とする）では主語は基本的に何もついていない名詞によって示される。したがって日本語におけるハとガの違い、つまり文における情報構造の違いをどうやって処理しているかが問題となる。他方、モンゴル語には *n'*, *bol*, *č*, *čin'* などの情報構造の標示要素があることが知られているが、これらは情報構造を示すのにどのように役立っているのだろうか。それらの使い分けの基準は何だろうか。特に日本語でハやガが現れるさまざまなケースを、モンゴル語ではどのように処理しているのだろうか。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

本稿では上記の問題を研究するため、日本語のハとガの使い分けについて様々なケースを詳しく扱った野田 (1985) を調査票として用い、コンサルタントからの聞き出しによってモンゴル語の情報構造の諸要素の機能を解明していくことを目的とする。具体的には上記の *n'*, *bol*, *č*, *čin'* の4つの形式を扱う(以下ではこれらを(本稿の)「対象形式」と呼ぶ)。これらのうち、*n'* は3人称人称小辞、*bol* は *bol-*「なる」の条件副動詞形 *bolbol* に(歴史的に)由来する小辞、*č* は累加の小辞、*čin'* は2人称単数人称小辞などとされている(2節の諸先行研究を参照)。本稿にはさらに *min'*, *tan'* の形式も現れるが、これらはそれぞれ1人称単数人称小辞、2人称複数人称小辞とされている。

なおモンゴル語の文例等はキリル文字による正書法からローマ字に翻字して記した。その翻字は次のような方式に拠っている: *a* = *a*, *б* = *b*, *в* = *v*, *г* = *g*, *д* = *d*, *е* = *je*, *ё* = *jo*, *ж* = *ž*, *з* = *z*, *и* = *i*, *й* = *j*, *к* = *k*, *л* = *l*, *м* = *m*, *н* = *n*, *о* = *o*, *ө* = *ö*, *п* = *p*, *р* = *r*, *с* = *s*, *т* = *t*, *у* = *u*, *ү* = *ü*, *ф* = *f*, *х* = *x*, *ц* = *c*, *ч* = *č*, *ш* = *š*, *щ* = *šč*, *ъ* = *”*, *ы* = *y*, *ь* = *’*, *э* = *e*, *ю* = *ju*, *я* = *ja*。特にことわらない限り、先行研究における表記も基本的に本稿による方式に統一していることに注意されたい。

2. 先行研究とその問題点

娜仁托娅 (2011) はモンゴル語の小辞 *min'*, *čin'*, *n'*, *č*, *l*, *bol* を扱った先行研究である。娜仁托娅 (2011) はチャハル・モンゴル語(モンゴル語チャハル方言)を中心に扱っている(なお娜仁托娅氏はチャハル・モンゴル語の話者である)。娜仁托娅 (2011) はこの問題に特化した先行研究であり、本稿の扱う主題標示という文法的な問題に関しては、ハルハ・モンゴル語とチャハル・モンゴル語の間における違いはそれほど大きくないものと考え、娜仁托娅 (2011) を先行研究として取り上げることとする。娜仁托娅 (2011) は主題標示を「取り立ての形式の一つである」と捉え、*min'*, *čin'*, *n'*, *č*, *l*, *bol* を取り立ての観点から解釈することを試みている(なお *min'* と *l* については本稿では扱わない)。まず以下では娜仁托娅 (2011) によるこれらの要素の出現分布に関する重要な指摘をあげる。

①これらの要素は先行する語の品詞的特徴が似ている。すなわち、格語尾の直後に接続し、主語以外の文成分にも付く。梅谷 (2003:214) は *min'*, *čin'*, *n'* について「名詞、数詞、形容詞、副詞、後置詞、動詞の副動詞形、動詞の形動詞形の直後に現れうる」としている。

② *čin'* は1人称や3人称とほぼ同じ割合で2人称代名詞の後に用いられていることが観察できる。

③ 親族名詞に付く *min'* の用例は全部で667件(2343件中)であるのに対し、親族名詞に付く *čin'* の用例は58件(3170件中)である。

②はもはや *čin'* が2人称所有の機能を(少なくとも一部の用例において)失っていることを意味していると考えられる。③は *min'* がまだ1人称所有の機能を大きく残しているのに対し、*čin'* はそうではないことを示していると考えられる。出現分布に関して、梅谷 (2003:210) が「新聞記事では、*čin'*, *tan'* を含む用例のほとんどが、対談形式の記事中で見つかった」としている点も注意を惹く。

次に諸形式の機能に関する娜仁托娅 (2011) の指摘をあげる。

① *min'*, *čin'*, *n'*, *č*, *l*, *bol* の諸形式は強調を表す。

②通常、モンゴル語では、ゼロ接辞で現れる名詞の主格形それ自体が新情報を担っている場合が多い。これに対し、*min'*, *čin'*, *n'*, *č*, *l*, *bol* は既知のもの、または旧情報を表す場合が多い。

③一つの文脈の中で、*min'*, *čin'*, *n'*, *č*, *l*, *bol* が一回だけ現れる際は強調を表し、二回、または二回以上現れる際は対比を表す傾向がある。

④ *č* は通常、累加の意味を表す場合が多いと解釈される。(中略)しかし、強調または限定の意味を表している用法も確認される。

⑤ *min'*, *čin'*, *n'*, *č*, *l*, *bol* の諸形式には話し手の主観的判断や心的態度を表す機能がある。まず *min'* は話

し手の指示対象に対する親近感を示し、一方 *čín'* は話し手の指示対象に対する疎遠や嫌悪感を示す場合が多い。*n'* は *min'* のように親近感を（あるいは親しくなりたいという意図や心的態度を）明確に表すこともなく、*čín'* のように嫌悪感を明確に表すこともない。*min'*、*čín'* に比べてみると、*n'* はむしろ指示対象に対する話し手の中立的立場（心的態度）を表す傾向がある。文末に現れる *bol* は疑問や不安、戸惑いなどのニュアンスを含む場合がある。

次に娜仁托娅 (2011) 以外の先行研究で、本稿の対象形式について分析しているものを示す。

岡田・向井 (2006) は *bol* の機能について①説明・定義に先立つ主題「～は(…である)」, ②際立たせ「～こそ」・「～ぞ」、としている。

梅谷 (2003) は *čín'*、*tan'* について、その直前の名詞句が (A) 指示代名詞、人称代名詞、固有名詞である場合、もしくは指示形容詞、人称代名詞属格を伴った普通名詞の場合と (B) それ以外、の 2 つの場合に分け、(A) の場合 *čín'* にも *tan'* にも所属用法の用例が見出されず、(B) の場合、*tan'* には非所属用法の用例が見出されない、としている。なお梅谷 (2003) のいう「非所属用法」が、本稿で問題にしている *čín'*、*n'*、*č*、*l*、*bol* の情報構造における機能を示す用法である。

以下に先行研究の問題点をあげる。

- ① 娜仁托娅 (2011) は「ゼロ接辞で現れる名詞の主格形」をもっぱら新情報を示すものと考えているが、「ゼロ接辞で現れる名詞の主格形」には主題を含む旧情報を示す場合もあれば、文焦点の主語を含む新情報、さらには対比や排他（総記とも）の名詞項を示す場合もあると考えられる。
- ② 娜仁托娅 (2011) は *min'*、*čín'*、*n'*、*č*、*l*、*bol* を既知のもの、または旧情報を表す場合が多く、全体として強調を示す、としているが、新情報を示す場合もあると考えられる。一方で、「強調」という語では説明になっていないという問題点もある。諸形式の違いについても、これを十分に明らかにしていない。
- ③ 岡田・向井 (2006) も *bol* の機能を 2 つ示しているが、どちらの機能がどのような条件下で生じるのかを明らかにしていない。
- ④ 梅谷 (2003) は (B) の場合における *čín'* を扱っていない。梅谷 (2003) の目的ももっぱら *čín'* と *tan'* の聞き手に対する態度の違いを明らかにすることに留まっている。

本稿では以上の問題点の解明を目指すものとする。

3. 本稿の研究手法と分析の手順・方法

3.1. 研究方法

本稿では野田 (1985) の例文を用い、まずこれを Google 翻訳によってモンゴル語に訳したものをコンサルタントに添削・修正していただいた。コンサルタントは 1989 年 *Övörxangaj* 県生まれの話者で、日本語に堪能な方である。しかるのちに、その元の日本語の文におけるハもしくはガに対応するモンゴル語の文の部分に \emptyset / *n'* / *bol* / *č* / *čín'* のいずれが出現可能であるか、出現した場合にその文はどのようなニュアンスを実現するかをコンサルタントの方に御教示していただいた。ただし、時間的な制約と、一部の文ではおそらく用いられないだろうという筆者の予測から、一部の形式については使用の可否を調査しなかったものもあることをことわっておく（特に *č* を調査しなかったケースが多い）。なお筆者はモンゴル語の主格については形の上では何もついていないものと考えているが、本稿では分析の便宜上 \emptyset をゼロ記号として用いることにする。日本語の文は基本的に野田 (1985) にあった原文のままであるが、モンゴル語の文の構造や表現が日本語のそれと大きく異なる場合、必要に応じて適宜逐語訳を加えた。

3.2. 適格性判断の結果の表示方法

適格性判断の結果の表示は、何もついていなければ「使用 OK」を、? は「少しおかしい」ことを、* は使用不可を示すものとする。#は、これが n' についている場合には後述の「選別」のニュアンス、bol についている場合にはやはり後述の「対比」のニュアンス、& についている場合には累加のニュアンス、cin' についている場合には聞き手に対する何らかの待遇的な態度のニュアンスを持つものとする。∅ 以外の形式に何もついていない場合は、上記のいずれのニュアンスもなく「主題」表示として機能しているものとする。

次に、各対象形式の適格性の判断を承け、それらの形式が用いられる、もしくは用いられない理由の説明を試みた。その説明は各例文の前に記している。なお時間的制約と筆者の力量不足からモンゴル語の例文にグロスをつけることはできなかった。日本語訳は直訳に近く、モンゴル語と日本語は語順および格、表現などの点でよく似ているので、日本語訳を以ってグロスに代えることとする。

3.3. 説明の用語の定義

説明には次の用語を用いた。まず n' に関して、コンサルタントの内省に基づけば、「(2 つあるもののうちの) ~の方 {は/が}」もしくは「(3 つ以上あるものの中の) ~ {は/が}」という意味を示すことがよく観察された。すなわち、何らかの全体集合が想定されていて、そのうちの1つの構成要素について述べる、という機能である。この場合、その全体集合は同じレベルの等質のメンバーから構成されていなければならないようだ。こうした「~の方 {は/が}」のようなニュアンスを「選別」と呼ぶことにする。

次に bol については「対比」のニュアンスを帯びることがよくある。「対比」という用語は日本語学で、特にハの研究において用いられているが、上記の「選別」との違いが問題になるのでここで若干の定義を行う。対比は選別と異なり、対比される対象は必ずしも同じレベルの等質なメンバーでなくともよいものとする。さらに、対比においてはその述語の内容も対比的なものとなっている必要がある。すなわち、「A は A'だが、一方 B は B'である」のように A と B が対比されている時には、A' と B' も対比的な内容である必要がある。

& については、「(~のみならず) ~も」のような意味を「累加」と呼ぶことにする。

ただこれらの用語の定義と説明には、若干トートロジーになっている面があるかもしれない。今後さらに対象形式が示すこれらの機能について考察を深め、より客観的な定義にしていく必要があると考えている。

3.4. 調査例文の分類とその表示

本稿では述語の種類によって調査例文を 4.1. 平叙文、4.2. 疑問文、4.3. 疑問文への返答文、4.4. 複文の4つに分けた(ここでいう「平叙文」とは「疑問文でないもの」の意とみなしていただいて問題ない)。さらに平叙文を「4.1.1. (日本語で) ハ (が出るもの)、主題であるケース」と「4.1.2. ハであるが、対比となるケース」「4.1.3. ガであるが、排他となるケース」、4.1.4. ガ、すなわち焦点や文全体が新情報であるケース」の4つに分けた。疑問文と返答文では「4.2.1. and 4.3.1. ハ、すなわち主題であるケース」と「4.2.2. and 4.3.2. ガ、すなわち焦点であるケース」の2つに分けた。なお疑問文はさらに「4.2.1.1. and 4.2.2.1. 疑問詞疑問文」、「4.2.1.2. and 4.2.2.2. 選択疑問文」、「4.2.1.3. and 4.2.2.3. 諾否疑問文」に下位分類した(返答文でも同様である)。基本的に仮説として、日本語でハが出る場合に対象形式は現れやすく、ガが出る場合に対象形式は現れにくいものと予想される。

さらに平叙文と疑問文については、述語の諸特性と対象形式が後続する名詞の諸特性とによって下位分類した。その際には中黒点の前後に「述語の諸特性・名詞の諸特性」のように表示した。説明と例文

はなるべく「ハのケース」では対象形式がより多く適格とされている順から、「ガのケース」ではより多くが適格とされなかった順から並べたが、必ずしも徹底できたかどうかについては心許ない。

なお本稿では文末に現れてモダリティを示す bol (すなわち終助詞的な bol) は扱わない。ただし X bol!? 「Xは(どうなんだ)!?」のようないいさしの bol は扱うものとする。

4. 調査結果と分析

4.1. 平叙文

4.1.1. ハ, すなわち主題であるケース

(1) 一般論の説明であるコピュラ文・時間の副詞項

談話中で初出の普通名詞を何らかのテーマについて一般論として説明するようなケースは題述文のもっとも典型的なケースである。このような場合, Ø, n', bol はいずれも使うことができ, 選別や対比のニュアンスを伴わないという。čín' にも主題を明確に言う以上のニュアンスはないという。

1-r sar { Ø / n' / bol / čín' } Ulaanbaatar xotyn xamgijn xüjten sar jum.

「一月はウランバートルの街の一番寒い月だ。」

(2) 一般論の説明であるコピュラ文・固有名詞

次の文も一般論の説明であるが, čín' は使えないという。その理由は, この文が一方的な説明に終始していて, 聞き手の存在が感じられないためであるという。これは čín' の口語的性格を反映しているものと考えられる。

Mongolyn xamgijn tom xot n' Ulaanbaatar xot jum. Ulaanbaatar xot { Ø / n' / bol / *čín' } Mongol ulsyn tövd oršdog.

「モンゴルで一番大きい街はウランバートルです。ウランバートルはモンゴルの真ん中辺にあります。」

(3) 一般論の説明であるコピュラ文・連体修飾節によって修飾された普通名詞

ただし次のように主題部分が長い例で čín' を用いるのであれば使うことができ, その場合には「聞き手が「12月が一番寒い」と言ったのに反論して言うような場合」に発話するのがもっともふさわしいという。他の形式は選別や対比のニュアンスを伴わず主題として使えるという。

Ulaanbaatar xotod xamgijn xüjten bajdag sar { Ø / n' / bol / #čín' } 1-r sar.

「ウランバートルの街で一番寒い月は1月だ。」

(4) 恒常的な時制(形容詞述語文)で対比の文・固有名詞

n' も bol も選別や対比のニュアンスが入ることなく, Ø と同様に主題の機能で使えるという。čín' は何らかの文脈があれば言えるような気がするが, 具体的にどのような文脈であるのか説明するのが難しいという。

Bajar { Ø / n' / bol / ?čín' } cajnd durtaj č arxind durgüj.

「バヤルはお茶は好きだがお酒は嫌いだ。」

(5) 恒常的な時制の文(動詞述語)・指示代名詞を伴った普通名詞

恒常的な時制の文でも n' は選別のニュアンスの無い主題として使えるという。bol は主題としても対比としても解釈できるという。čín' も使えるが, 何か前の文脈で相手の行為に関して話し手が時間を間違ってしまった, などのことが起きたのを承けて言うのが自然であるという。

Ene cag { Ø / n' / (#)bol / #čín' } sar бүр 1 минут орчим урагсїldag.

「この時計は1か月に1分ぐらい進む。」

(6) 恒常的な時制の文 (動詞述語)・代名詞属格を伴った親族名称

すでに代名詞の属格によって修飾された親族名称の場合、ある人称による所有の制限がすでにかかっているため、本来所属人称であった形式は使用しにくいことが考えられる。次の文では自分の兄であることが明らかなので、3人称の人称小辞は使えないという。他方、2人称の人称小辞はそのような人称の矛盾によりその使用がブロックされることがないという。すなわち *n'* に比べ *čín'* の方が主題標識としての文法化が進んでいることがわかる。*bol* は対比のニュアンスを伴うという。

Manaj ax nar { Ø / *n' / #bol / čín' } bügd Ulaanbaatart am'dardag.

「私の兄たちはみんなウランバートルに住んでいる。」

(7) 現場指示のコピュラ文・指示代名詞

指示代名詞は定であり、現場指示であればそれが主題であることは明白である。このような場合は、おそらく Ø で十分であるため、説明文であっても *n'* は選別、*bol* は対比のニュアンスを伴うようだ。次の文で *čín'* を用いるのはやや変で、「おまえは別の町の地図だと思っているけど、そうじゃないよ、これがウランバートルの地図だよ」と言うような場合ならかるうじて言えるかもしれないという。ここで話者から「*čín'* は独り言では言わないと思う、相手あつての何らかの情報を伝える、という感じがする」という内省を得た。

Ene { Ø / #n' / #bol / ? #čín' } Ulaanbaatar xotyn gazryn zurag jum.

「これはウランバートルの地図です。」

(8) 現場で使用された「全体と部分のハガ構文」(モンゴル語では *propriative* によるコピュラ文)・普通名詞

次の文でそれぞれ *n'* は選別、*bol* は対比のニュアンスがあれば言えるという。*čín'* は文法的には使えそうであるが話者にとっては変に感じられる文であり、言わない、その理由はわからないという。「この部屋」が聞き手のものであるとか、聞き手が窓の大きさを気にしていた、などの状況があれば言えるのではないかと考えたが、この文でなぜ *čín'* が許容されないのかの理由はよくわからない。なおモンゴル語の表現は *conx-toj window-PROPRIETIVE* という述語によって構成されている。

Ene öröö { Ø / #n' / #bol / *čín' } tom conxtoj.

「この部屋は窓が大きいですね。(lit. この部屋は大きい窓持ちだ.)」

(9) 現場での具体的な指示物についてのハガ構文・指示形容詞を伴った普通名詞 (斜格名詞項)

n' は選別、*bol* は対比のニュアンスがあれば言えるという。*čín'* は指示物が聞き手の所有するカメラであれば言えるという。なお *kamjer-yg camera-ACC* である (略号は Leipzig Glossing Rules にあるもののみとする、以下でも同じ)。

Ene kamjeryg { Ø / #n' / #bol / čín' } ašiglaxad xjalbar.

「このカメラは使い方が簡単です。(lit. このカメラを利用するのは易しい.)」

(10) 恒常的なハガ構文 (形容詞述語)・1人称人称代名詞

次の文で、*bol* は他人との対比であれば言えるという。*č* は累加の意味にしかないという。

Bi { Ø / *n' / #bol / #č / *čín' } num xarvax durtaj.

「私は弓を射るのが好きです。」

(11) 恒常的に真だが現場におけるハガ構文 (形容詞述語)・[形動詞形+与格]

[形動詞形+与格] (下記の文の or-o-x-o-d enter-E-PTCP.IPFV-E-DAT) で条件を提示する一般論の文の場合, 長い項ではあるが n' は許容されないようだ. bol は対比の文脈があれば使えるという. čin' は使えないが, これは一般論であり, 聞き手と関係づけることが難しいためであろうと考える.

Ene cecerlegt xüreelend oroxod { Ø / *n' / #bol / *čín' } möngö xeregtej.

「この公園に入るにははお金が要ります。」

(12) 現場的な一般論のハガ構文 (動詞の形動詞形を含む複雑な文)・指示形容詞を伴った普通名詞もしくは形動詞形の行為名詞

次の文に関しては, 似た意味の3つの構文を作り, それぞれの文の主題部分について対象形式の使用の可不可を問うた. 3つの構文の中では, 主題兼主語が単純な名詞である一番上の文が最もよい文であると判定された. 2つ目と3つ目の文は形動詞形が主語であるため, n' が必須である (つまり Ø は許容されない). 1つ目の文で bol は対比のニュアンスなく使用可能であるという. čin' はこの命題を聞き手に関係づけることが自然でないためか, いずれの文でも許容されない.

Ene surguulijn asuudal { Ø / n' / bol / *čín' } cööxön bagštaj.

Ene surguul' cööxön bagštaj bajгаа { *Ø / n' / #bol / *čín' } asuudal jum.

Cööxön bagštaj bajгаа { *Ø / n' / *bol / *čín' } ene surguulijn asuudal.

「この学校の問題は先生が少ないことだ. / この学校は先生が少ないのが問題だ. / 先生の少ないことはこの学校の問題だ。」

(13) 過去の願望のモダリティの文・1人称人称代名詞

感情述語の主語は基本的に1人称に制限されるため, 主題として取り立てることは難しいと考えられる. č は累加の意味で使用できるが, 他の対象形式はいずれも許容されなかった.

Bi { Ø / *n' / *bol / #č / *čín' } neg udaa Kioto ruu javaxyg xüssen.

「私は一度京都へ行って見たかった. (lit. 私は一度京都へ行くことを望んだ.)」

(14) 現場での話し手自身の状況についての判断文・名詞を副詞的に用いた時間の副詞項

n' は使えないが, これは現況に対する判断であり, 「今日」という状況語を選別する母集合として全体集合が考えられない文脈であるためであると考えられる. 一方, bol は昨日や一昨日との対比で言うことができると考えられる. čin' はこの文では聞き手と何ら関係づけることなく, 単なる主題の機能で使うことができるという.

Önödör { Ø / *n' / #bol / čín' } cas orox bololtoj.

「今日は雪が降りそうですね。」

(15) 現場での話し手自身の状況についての判断/宣言・1人称代名詞

ここでは bi n' と bi č について主に問題とする. 説明が長くなるため, ここでは先に例文を提示する.

Bi { Ø / #n' / #bol / (#)č / ? #čín' } ene ažlyg oroj duusgax jostoj.

「私はこの仕事を夜までに仕上げなければならない。」

コンサルタントによれば, bi n' や čin' のように1/2人称代名詞に n' が後続する表現は, おそらく2010年以降ぐらいからだろうが, 特に若い女性などがネットのチャット上などでやりとりする時に使う

ようになったが、ふだんの話し言葉ではあまり聞かない。もちろん硬い書き言葉では現れない。内モンゴルの方言にはさらに使うところがあるのではないかと、ということである。なおコーパス¹で検索したところ、*bi n'* も *čin'* もいずれの例も得られなかった。*bol* は対比の状況でのみ使用が可能であるという。すなわち、何人か他の人について別の事情を話して、その後対比的に言う場合である。*bi bol* はコーパスから 58 例得られるのでこの組み合わせが許容されないというわけではない。*bi čin'* も 69 例あり、同様である。*č* は累加の意味でも使えるが、主題の意味でも使えるという。今回の調査で *č* についてさまざまな例を調査したが、はっきり主題の意味で使えると判断されたのはこの 1 例のみであった。小沢 (1983: 549) には *č* について「...は ...も」とあり、「*Bi č medne*. 私も (は) 知っている」(訳も小沢 (1983) による) という例があがっている。

Forker (2016) は累加標識 (additive marker) についての類型論的な研究だが、そこでは累加形式によってカバーされる次の 7 つのコア機能を特定した：① additive (累加)、② scalar additive (序列上の極端)、③ contrastive topics and topic switch (対比焦点と主題転換)、④ indefinite (不定)、⑤ concessive (譲歩)、⑥ conjunctive adverb 'and then' (接続詞的副詞)、⑦ constitute coordination (構成要素の等位接続)。ここでは③と⑥に注目したい。そこではウデヘ語の③の例 (*mindu sata bie s'ei=de anči*「私に 砂糖 あるが、塩はない、=de は累加標識」) やトルコ語の⑥の例 (*kimse Semraya gel dememiş; o da evde oturacaktı*。「誰も セムラに 来いと 言わなかったようだ; (それで) 彼女は 家に 留まるみたいだ、da は累加標識」) があがっている。2 つの例に共通しているのは、先行する文で相反する述語や、違うレベルの主語について述べている点である。そこでモンゴル語の話者に訊いてみたところ次のような内省を得た：*Nadad saxar č bajna*. 「私に 砂糖 {は/も} ある」という文は、「その国に塩がたくさんある」というような先行文脈に後続する際には「私に砂糖はある」のような意味を実現し、「私に飲み物も食べ物もある」というような先行文脈に後続する際には「私に砂糖もある」のような累加の意味を実現するという。*č* が {は/も} のいずれの意味をどのような文脈において実現するかについては今後さらに研究・検証していく必要がある。

4.1.2. ハであるが、対比となるケース

(16) 恒常的状态だが現場における否定の可能文・1 人称人称代名詞

次の文は一文中に 2 つハが出てくる文で、2 つ目のハは対比と解釈されるものである。この場合対象形式はいずれも許容される。まず *n'* は他言語からの選別の、*bol* もやはり他人や他言語との対比のニュアンスを伴って使用可能であるという。*čin'* は聞き手が中国語の能力を持っていて、聞き手に関連する文脈があれば使えそうであるという。

Bi xjatadaar { Ø / #n' / #bol / #čin' } jar'ž čadaxgüj.

「私は中国語はできません。(lit. 私は中国語で話すことができません。)」

(17) 形容詞述語による対比の文・固有名詞

次の文も典型的な対比の文であるが、ここで対象要素を 2 つ使うことの可否を問うてみた(なお *Ø* はもっとも自然な表現である)。結果は次の通りであった。まず *n'* は許容されないが、これはお茶とお酒が同じ集合に属するものではないので選別の解釈が成り立たないためであると考えられる。*bol* は対比の文脈なので使えるという。*čin'* は話し相手のお酒や話し相手のお茶であれば言えるという。この場合には、斜格項の名詞についた *čin'* がその名詞の 2 人称による所有を示すことがわかる。

**Bajar cajnd n' durtaj č arxind n' durgüj.*

¹ コーパスは Mongolian National Corpus (Corpus Technologies が 2007 年から 2009 年にかけて開発したウェブコーパスで、総語数は 1,160,000 語) である。

Bajar cajnd bol durtaj č arxind bol durgüj.

Bajar cajnd čin' durtaj č arxind čin' durgüj.

「バヤルはお茶は好きだがお酒は嫌いだ。(cajn-d tea-DAT, arxin-d liquor-DAT)」

(18) 現場における形容詞と恒常的述語による対象物の対比的な説明・指示形容詞を伴った普通名詞
次の文も対比であり bol は許容されるが, n' は許容されない. n' が使われないのは「使い方」と「故障」が同じ集合に属さないためであると考え.

Ene utas xereglexed { Ø / #n' / bol / ?čin' } xjalbar bolovč amarxan evderdeg.

「この電話は使い方**は**簡単ですが, よく故障します。」

(19) 現場における否定のコピュラ文・形動詞形の修飾を伴った普通名詞

次の文のうち, n' を用いると, 2つ以上像があって, 聞き手は違った方の像を見ており, 話し手は「そっちの像ではない」と言うケースになるという.

(“Süxbaataryn xöšöö mön üü?”)

“Ügüj ee, ter { Ø / #n' / #bol / čin' } Süxbaataryn xöšöö biš.

Tend bajгаа xöšöö bol Süxbaataryn xöšöö.”

(「あれがスフバートル像ですか?」)

「いいえ, あれ**は**スフバートル像ではありません. 向こうの像がスフバートル像です。」

4.1.3. ガであるが, 排他となるケース

(20) 現場における存在の否定文・普通名詞

次の文では n' は可能であるという. ヒマとお金は同じ集合に属さないが, 「映画のための」お金, という限定の機能で n' が働いている感じがするという. bol については対比のニュアンスがなくとも言えそうであるという. čin' は許容されないが, これは問題がもつばら話し手にとってのもので, 聞き手と関連付けられないからではないかと考える.

(“Ta margaaš kino üzexijg xüsč bajna uu? Margaaš čamd zav bajгаа biz dee?”)

“Nadad zav bajгаа č möngö { Ø / n' / (#)bol / *čin' } bajxgüj boloxoor üzež čadaxgüj.”

(「明日映画に行きませんか? 明日は暇でしょ?」)

「暇ですが, お金**が**ないので無理ですね. (lit. 私に暇がありますが, お金がないので見ることはできません.)」

(21) 現場における訂正の返答のコピュラ文・形動詞形によって修飾された普通名詞

次の文において, 像は2つ以上あるのですが n' は問題ないという. 対比であるため bol も問題ないが, 話し手に関連するものや関連する事態ではないため čin' は使われないものと考え.

(“Süxbaataryn xöšöö mön üü?”)

“Ügüj ee, ter Süxbaataryn xöšöö biš. Tend bajгаа xöšöö { Ø / n' / #bol / *čin' } Süxbaataryn xöšöö.”

(「あれがスフバートル像ですか?」)

「いいえ, あれはスフバートル像ではありません. 向こうの像**が**スフバートル像です。」

4.1.4. ガ, すなわち焦点や文全体が新情報であるケース

(22) 現場における文全体が新情報の [動詞述語+jum] による文・親族名称

文焦点, すなわち文全体が新情報である場合, どの対象形式も使用できない.

(“Či gojo cagtaj jum aa!”)

“Tijm ee, surguul'd elssend bajar xürgež aav { Ø / *n' / *bol / *č / *čin' } avč ögsön jum.”

(「いい時計を持っていますね。」)

「ええ、父が入学祝いに買ってくれたんです。」

(23) 現場における文全体が新情報の文 (形容詞述語)・固有名詞

次の文も上記と同様である。

(“Bid ene togloltod xožigdčixloo.”)

“Bajaraas { Ø / *n' / *bol / *č / *čin' } bolloo, aldaa ix gargasan boloxoor.”

(「今度の試合は負けてしまったね。」)

「バヤルが悪いんだ、失敗ばかりするから。」

(24) 現場における現在進行形による存現文・普通名詞

次の文は対話における受け答えでなく、全く突然に文全体が新情報である文を発話する文で、いわゆる存現文であるが、やはり対象形式は使えない。

Utas { Ø / *n' / *bol / *čin' } duugarč bajna. Xen negen avaaraj².

「電話が鳴っていますよ。誰か出てください。」

(25) 動詞の過去形による過去に起きた出来事の報告・普通名詞

次の文も上記と同様である。

Vokzal deer najzaa xüleež bajtal 30 orčim nasny emegtej { Ø / *n' / *bol / *čin' } nadtaj jum jarixaar irsen.

「駅で友達を待っていたら、30歳ぐらいの女の子が話しかけて来た (lit. 私と何か話に来た).」

(26) 現場における [形容詞+コピュラ] による現在の状況の報告・普通名詞

次の文も上記と同様である。

Aa, baruun tald tengер { Ø / *n' / *bol / *čin' } tod ulaan bajna.

「あ、西の空が真っ赤だ。」

(27) 動詞の過去形による過去に起きたことの報告・固有名詞

次の文も「現場における文全体が新情報の文」ではあるが、「何人かが危篤に近いようなたいへんな状態だったが、そのうちのバヤルが亡くなった」というような状況であれば、n' を用いて言えるという。したがって n' は選別のニュアンスがある時、全体が新情報の文でも使えることがわかる。

Öčigdör üdees xojš Bajar { Ø / #n' / *bol / *čin' } taalal tögsöv.

「きのうの午後、バヤルさんが亡くなった。」

(28) 現場における動詞の現在進行形による知覚／発見 (mirative)・普通名詞

次の文では、「あの人がいつも言っていた例の海」というような意味でなら n' を用いて言うことができるかもしれないという。同様に、「聞き手が「海を見に行こう」と何度も言っていた」というような状況があり、聞き手がこだわっていた海ということであれば言えるかもしれないという。

² 一人の査読者の方からのコメントによれば、この文には Xen negen n' avaaraj. と3人称の小辞を用いる必要があるという。

Aa, dalaj. Dalaj { Ø / ?#n' / *bol / ?#čin' } xaragdaž bajna.

「あつ、海だ。海が見える。」

(29) 動詞の近過去形による過去のできごとの報告・普通名詞

次の文では、「久しく対面であつてもいなかったし、電話で話してもいなかったが」という状況下であれば、対比のニュアンスで **bol** を使うこともできるという。したがって **bol** は対比のニュアンスがある時には、全体が新情報の文でも使えることがわかる。

Öčigdör urt xugacaany daraa Bajaraas caxim šuudan { Ø / *n' / ?#bol / *čin' } irlee.

「昨日久しぶりにバヤルさんからメールが来ました。」

(30) 現場における [形容詞+コピュラ] による現在の状況の報告・普通名詞

次の文も同様に対比のニュアンスがあれば **bol** が使えるという。ただし **čin'** も特別なニュアンスを伴わずに使えるという。その場合、むしろ「隣の部屋はうるさいですね。」のような意味になっているのかもしれない。

Xažuugijn öröö { Ø / *n' / #bol / čin' } čimee šuugiantaj bajna.

「隣の部屋がうるさいですね。」

(31) 現場における形容詞述語によるハガ構文 (ガの名詞項はモンゴル語でも主語)・普通名詞

次の文では **n'**, **bol**, **čin'** のいずれも許容されない。

Ene cecerlegt xüreeleend oroxod möngö { Ø / *n' / *bol / *čin' } xeregtej.

「この公園に入るにはお金が要ります。」

(32) 一般論のハガ構文・普通名詞 (不定対格の名詞項)

bol は弓矢や競馬との対比であれば言えるという。

Bajar mor' { Ø / *n' / #bol / *čin' } unaxdaa sajn.

「バヤルさんは乗馬が上手だ。(lit. バヤルさんは馬を乗るのが上手だ.)」

(33) 現場における形容詞による指示物の特徴を説明するハガ構文・[形動詞形+与格 (斜格名詞項)]

次の文では、**bol** に限って、対比のニュアンスがあれば言えるかもしれないという。なお **ašigl-a-x-a-d use-E-PTCP.IPFV-E-DAT** である。

Ene kamjeryg ašiglaxad { Ø / *n' / ?#bol / *čin' } xjalbar.

「このカメラは使い方が簡単です。(lit. このカメラを使うのに易しい.)」

(34) 過去の願望のモダリティの文・1人称人称代名詞 (斜格名詞項)

次の文の該当箇所には日本語でもハが入っていないし、「私は一度京都へ行ってはみたかった。」という文も変に感じられるが (なお筆者は 1965 年東京生まれの日本語母語話者である)、モンゴル語でも対象形式はどれも使うことができない。

Bi neg udaa Kioto ruu javaxyg { Ø / *n' / *bol / *č / *čin' } xüssen.

「私は一度京都へ行って 〇みたかった。(lit. 私は一度京都へ行くことを望んでいた.)」

4.2. 疑問文

4.2.1. ハ, すなわち主題であるケース

4.2.1.1. 疑問詞疑問文

(35) 現場におけるコピュラ文 (誰)・指示形容詞を伴った普通名詞

疑問詞疑問文では疑問の前提である主題を話し手と聞き手が認識していなければならないので、対象諸形式の使用は難しいと思われる。bol については、「たくさんの人がいて、「あの人は誰、その人は誰、あの人は誰、じゃあ、そしたらあの人は誰ですか？」というような対比の状況であれば言えるかもしれないが、ふつう発話する文とは思えないという。

“Ter xūn { Ø / *n' / ?#bol / *č / *č'in' } xen be?” “Ter xūn minij bagš”.

「あの人は誰ですか？」「あの人は私の先生です」

(36) 現場におけるコピュラ文 (いつ)・人称代名詞属格を伴った普通名詞

しかし次の文では n' も čin' も許容される。2人称の誕生日に関する質問であるため čin' が許容されるものと考えられるが、ta と č'i の敬意の度合いの違いは効力を示さず、しかも čin' は単に主題提示の機能に解釈されるという。bol はやはり対比で、他にもいろんな質問をした後で誕生日について聞く場合に使えるという。n' がなぜ使用可能であるかについては、誕生日とはある人間の側面であり、誕生日以外にもその人の諸側面についていろいろ他の質問が考えられるという状況であり、選別としての理解に問題がないためであると考えられる。

“Tany törsön ödör { Ø / n' / #bol / *č / č'in' } xezee ve?” “Guravdugaar saryn 27”.

「あなたの誕生日はいつですか？」「3月27日です」

(37) 現場におけるコピュラ文 (どこ)・形動詞形に修飾された普通名詞

次の文で n' は問題ない。出口、入り口などは建物の側面であるためと考えられる。bol は対比のニュアンスを伴うという。č'in' を用いると、「おまえはよくわかっているだろう、入り口はどこなんだ」と訊くような感じがして、上から目線の表現になるという。

“Orox xaalga { Ø / n' / #bol / *č / #č'in' } xaana bajna?” “Ter xar xaalga”.

「入り口はどこですか？」「あの黒いドアです」

(38) 現場において習慣形動詞形の動詞によって聞き手について訊く文 (どんな〜)・2人称代名詞

1/2人称代名詞に n' が後続する bi/č'i n' に関しては (15) で分析した。

“Bajar(aa), č'i { Ø / ?n' / #bol / *č / *č'in' } jamar xөгžim ix sonsdog ve?” “Bi rok ix sonsdog”.

「バヤル、君はどんな音楽をよく聞きますか？」「私はロックをよく聞きます」

なお次のように文末の疑問標識 ve を gelee 「〜と言っていた」に変えれば čin' が使えるようになるという。

“Bajar(aa), č'i č'in' jamar xөгžim ix sonsdog gelee?” “Bi rok ix sonsdog”.

「バヤル、君はどんな音楽を聞いているって言ってたっけ？」「私はロックをよく聞きます」

なぜ gelee に文末を変えれば文が成立するのかという点については、次のように考える。聞き手自身に関する質問について、聞き手がその答えについて情報を持っているのは当然なので、č'in' を用いて聞き手に関係づける必要は全くない、したがって č'in' はふつう用いられないものと考えられる。しかしそのことをすでに一度訊いたことがあり、話し手が知識として知っていたという状況であれば、あらためてそれを聞き手に関係づけて訊く、ということが成立するのかもしれない。

(39) 習慣形動詞形の動詞によって一般論を訊く文・普通名詞

次の文における xaa-「閉める」は他動詞で、目的語は動詞直前位置を離れているが明示的な対格形を取っていない。これで問題はないという。n' を用いた表現は、例えば違う土地から来た人がこちらの事情をよく知らないので、こっちの銀行は何時に閉まるのか?, などと訊く場合に使えるという。これに対して bol は郵便局や市役所と対比させて言う場合に使えるという。したがってこの例は選別と対比の違いを解明することに役立つようである。すなわち選別は同じレベルの等質なもものからなる全体集合のうちの一つ、と意識されていることになる。čin' を用いるのは、聞き手がその銀行で働いている場合などであるという。

“Bank { Ø / #n' / #bol / *č / #čin' } xeden cagt xaadag ve?”, “3 cagt xaadag”.

「銀行は何時に閉めますか?」「3時に閉めます」

(40) 現場におけるコピュラ文(誰)・名詞(項)用法の形動詞形

まず次の文よりも主語である xen が文頭に来る Xen tegž xelsen be? 「誰がそう言ったのか?」の方が好まれる。この文は SV の統語的構造には合っているが、情報構造上は疑問の焦点が前に来て、話し手および聞き手がともに知っている前提情報が後に来るので、情報構造上は一般的でない語順になる。Xen tegž xelsen be? については「ガ、すなわち焦点であるケース」で考察する。

次の文では形動詞形が主語であるため、Ø が許容されず、n' もしくは čin' が必須である。bol は形動詞形に後続した場合、条件の意味、すなわちこの文では「言ったのなら」になってしまい、許容されない。Tegž xelsen xün bol xen be? 「そう言った人はだれですか?」(主語を連体修飾する形動詞形を用いた名詞にした文)であれば何とか言えるが、疑問詞が文頭にある文の方がふつうであるという。čin' を用いた文では、現場で目の前にいる2人称の人物たちに問いたず場面が想起され、「あなたたちのうちの誰がそんなことを言ったの?」のように上から目線で叱っているようなニュアンスを感じるという。これに対し、n' を用いると(おそらくは相対的に)それよりも優しい言い方になる。しかも目の前にその発言を行ったとおぼしき人物がいるのではなく、話題に上っている人物や発言に対する問いであつてもよいという。

“Tegž xelsen { *Ø / n' / *bol / *č / #čin' } xen be?” “Bajar tegž xelsen”.

「そんな風に言ったのは誰ですか?」「バイアルがそんな風に言ったんです。」

(41) 現場における過去形による文(誰)・指示代名詞

次の文で、「この花」がたくさん持って来た花のうちの一つであるならば、つまり選別のニュアンスがあれば n' が使えるという。一方、bol は使えないが、これは文脈上対比にはならないためであると考えられる。

(Ene bol) gojo ceceg jum.

Üünijg { Ø / #n' / *bol / *čin' } xen avčirsan be?

「(これは)きれいな花ですね。これは誰が持って来たんですか?」

(42) 現場における恒常形動詞形による存在文(何冊の本)・普通名詞(斜格名詞項)

次の文では n' は選別の、bol は対比のニュアンスがあれば使えるという。čin' も、例えば、聞き手が紹介してくれて案内してくれている図書館について訊く場合には問題なく使えるという。

Ene nomyn sand { Ø / #n' / #bol / čin' } xeden nom bajdag ve?

「この図書館には本が何冊ぐらいありますか。」

4.2.1.2. 選択疑問文

(43) 現場におけるコピュラ文・固有名詞の属格形を伴った普通名詞

選択疑問文の主題は、すでに主題としての性格が強いためか、対象諸形式は使用されにくいようだ。n' は別の人の家が多く並んでいる状況であり、選別の状況は明確であるためか、問題なく使われる。bol はこれを無理に使う理由が全く感じられず、対比の文脈での使用も考えにくいという。“Bajaryn ger bol?” と bol で終わる文は使えるという。č は、寮など、バヤル以外にも何人も住んでいるという状況で、バヤルの家もここなのか? と訊く場合なら言えるかもしれないが、やはりふつうには使用されない。その場合「バヤルもここに住んでいるのか?」と訊くのがもっと普通である。

“Bajaryn ger { Ø / n' / *bol / *č / *č'in' } ene cagaan bajšin üü, esvel ter cenxer bajšin uu?” “Ter cenxer bajšin”.

「バヤルの家はこの白い家ですか、それともあの青い家ですか?」「あの青い家です」

(44) 現場における選択疑問文・普通名詞 (斜格名詞項)

n' を用いると、その会議は「XX 氏主催」である、など、誰かある人と関係がある、ということになる。č'in' を使った場合も聞き手に関係の深い会議なら言えるという。したがってこのような斜格項の場合、n' や č'in' は所有人称としての機能を強く示すようだ。bol は使えないが、文末の疑問表現を変えて、“Margaašijn xurald bol xen n' irex ve?” であれば何とか言えるという。バヤルかバートルの二人のどちらかが来ることが既に分かっている状況でこれを言うので、xen n' はその二人のうちのどちらかを意味することになる。しかしここでも bol は余計で、要らない感じがするという。やはり疑問文の主題は話し手聞き手の双方に前提とされているものなので、さらに主題として取り立てる必要性がないと考えられる。

“Margaašijn xurald { Ø / #n' / *bol / č'in' } Bajar esvel Baatar irex üü?” “Bajar irme”.

「明日の会議にはバヤルが来るんですか、バートルが来るんですか?」「バヤルが来ます」

4.2.1.3. 諾否疑問文

(45) 現場における形容詞文・指示形容詞を伴った普通名詞

n' の使用は少なくとも文法的には問題なく、選別のニュアンスがはっきり出るという。ただし n' を使わなくとも対比のニュアンスは十分に出るので、実際にはあまり言わないと思われるという。č の使用は累加の意味になる。疑問文の主題はやはり主題としての性格が明確であるためか、bol の使用は不要に感じられるという。“Ene max bol?” と訊くのであれば自然であるという。č'in' は、相手が話しにくれた肉について、「これは本当に美味しいのか!?’と疑っているような場合に使用できるという。あまり良い感じでは訊いていない感じになるという。その場合の返答文に“Tijm ee, ene max č'in' ix amttaj”. とすることもできないという。なお「この肉こそがうまいんだよ」という意味で返答する場合には限定の l を用いて“Tijm ee, ene max l ix amttaj”. とすることができるが、その時にさらにその前に č'in' を用いて“Tijm ee, ene max č'in' l ix amttaj”. とも言い、č'in' があるとその限定をもっと強めた言い方になるという。一方「聞き手に関係する」という意味合いはないという。

“Ene max { Ø / ?#n' / *bol / #č / č'in' } amttaj juu?” “Tijm ee, ene max ix amttaj”.

「この肉はおいしいですか?」「ええ、この肉はとてもおいしいです」

(46) 現場におけるコピュラ文 (ただし対象の人物は現場にいない)・指示形容詞を伴った普通名詞

次の文で n' を使うと、「何人が写っている中で、この人は?」と訊いている感じがするという。つまり選別のニュアンスが生じる。bol は文章語のように感じられて使えないという。

“Ene { Ø / #n' / *bol / #č / *č'in' } Bajar mōn üü?” “Ügüj ee, (ene) Bajar biš”.

(写真を見ながら, ひとりだけ知らない人がいるので誰だろうと思って)
「この人はバヤルですか?」「いいえ, バヤルじゃないです」

(47) 現場における聞き手のことを訊くハガ構文・普通名詞

次の例では, 甘い料理との対比であれば bol が使用できるという.

Ta xaluun nogootoj xool { Ø / *n' / #bol / *čín' } idež čadax uu?

「あなたは辛い料理が食べられますか?」

(48) 現場における定動詞諾否疑問の形式による依頼文・普通名詞 (斜格名詞項)

ここでは語順を変えた2つの構文について対象形式の使用の可不可を問うた. まず次の文では国内電話との対比であれば bol が可能であると判断された.

Olon ulsyn duudlaga { Ø / *n' / #bol / *čín' } ter utsaar xijne üü.

「国際電話はあその電話でかけて下さい。」

(49) 現場における定動詞諾否疑問の形式による依頼文・普通名詞

次の文ではどの形式も不可と判断された. これらの文で対象形式が使えないのは, モダリティ的な意味が原因であるのかもしれない. もしくは olon ulsyn duudlaga 「国際電話」が焦点名詞句だからかもしれない.

Ter utsaar olon ulsyn duudlaga { Ø / *n' / *bol / *čín' } xijne üü.

「あその電話で国際電話はかけて下さい。」

4.2.2. ガ, すなわち焦点であるケース

4.2.2.1. 疑問詞疑問文

(50) 現場における過去形動詞形による文 (誰)・疑問詞

次の文では n' と bol と čín' のいずれも使用不可能であるという.

Ene bol gojo ceceg jum.

Xen { Ø / *n' / *bol / *čín' } üünijg avčirsan be?

「これはきれいな花ですね. これは誰が持って来たんですか?」

(51) 過去形動詞形による文 (誰)・疑問詞

次の文では「何人かの人のうちの誰が言ったのか?」という意味で, またそういう状況であれば n' を用いて言うことができるという. すなわち n' は必ずしも主題でなければならないわけではなく, 焦点であってもよいことがわかる.

“Xen { Ø / n' } tegž xelsen be?” “Bajar tegž xelsen”.

「誰がそんなことを言ったんですか?」「バヤルが言ったんです」

4.2.2.2. 現場における選択疑問文

(52) 形容詞述語文 (誰)・疑問詞

次の文では n' か čín' のいずれかが必須である. čín' が使われるのは, この二人の他にも人がいる状況で, この二人のどちらかもしくは両方に対して, あなたたち二人のうちどちらが若いかな, を訊いている場合であるという. 返答文は, その問いにバヤルの方が答えている文であるという. n' はそのような限定なく広く使われるもっとも一般的な表現であるという.

“Bajar Baatar xojoryn xen { *Ø / n' / *bol / *č / čin' } zaluu ve?” “Baatar zaluu”.

「バイヤルとバートルでは、どちらの方がが若いのですか？」「バートルの方が若いです」

(53) 現場におけるコピュラ文（どれ）・疑問詞

al' 「どれ」はいくつかの選択肢から選ぶものなので選別の n' がないと使用できないという。したがって次の文における n' は必須である。

“Al' { *Ø / n' / *bol / *č / čin' } Čingeltej uul ve?” “Xamgijn öndör uul”.

「どれがチンゲルテイ山ですか？」「(あの) 一番高い山です」

n' を 2 つ用いた文も許容される。「複数見える選択肢のうちのどれであるか？」という選別のニュアンスがより強く感じられるという。

“Al' n' Čingeltej uul n' ve?” “Xamgijn öndör uul”.

コピュラ文の枠組みにおける主語と述語を入れ替えた次の文も使用可能である。

“Čingeltej n' al' uul ve?” “Xamgijn öndör uul”.

「チンゲルテイ山はどの山ですか？」「(あの) 一番高い山です」

さらにこれに n' を 2 つ用いた文、uul 「山」を省いた文、それに n' を 2 つ用いた文を訊いてみたがいずれも許容される。n' を 2 つ用いた場合にはやはり選別のニュアンスが強くなるという。

“Čingeltej n' al' uul n' ve?” “Xamgijn öndör uul”.

“Čingeltej uul n' al' ve?” “Xamgijn öndör uul”.

“Čingeltej uul n' al' n' ve?” “Xamgijn öndör uul”.

(54) 現場におけるコピュラ文・固有名詞

次の文でもやはり n' は必須である。特に応答文の方で必須なのは、モンゴル語の文の方に被修飾名詞の「人」にあたる語がないことに起因していると考えられる³。

“Al' { *Ø / n' } Bajar ve?” “Nüdnij šiltej n' Bajar”.

「どれがバイヤルですか？」「あのメガネをかけた人がバイヤルです」

“Bajar { *Ø / n' } al' be?” “Nüdnij šiltej n' Bajar”.

「バイヤルはどれですか？」「あのメガネをかけた人がバイヤルです」

日本語と違って次の疑問文は使えない。少なくともこのタイプの文では、al' 「どれ、どの」は uul 「山」を修飾することはできるのに xün 「人」は修飾できないということになる。その理由は現時点ではまだよくわからない。

“*Al' xün n' Bajar ve?” “Nüdnij šiltej n' Bajar”.

「どの人がバイヤルですか？」「あのメガネをかけた人がバイヤルです」

4. 2. 2. 3. 諾否疑問文

(55) 現場におけるコピュラ文・指示代名詞

焦点項であるが、n' は特別なニュアンスもなく問題なく使えるという。他の人も写真の中にいるので

³ この点は査読者の一人の方からいただいたコメントに基づいている。

選別の解釈が自然に適応されるためであると考えられる。一方他の3形式は使えない。n' は主題項であるか焦点項であるかという情報構造上の対立にそれほど関わってはいないものと考えられる。bol はやはり他の人について訊いた後で Xarin ene bol? と訊くのであれば使えるという。čin' も使えない。なお ene čin' の組み合わせはコーパスで 260 例ほど出てくるのでこの組み合わせが許容されないわけではない。

“Ene { Ø / n' / *bol / *č / *čin' } Bajar mōn üü?” “Ügüj ee, (ene) Bajar biš”.

(写真を見ながら、バヤルがどこかにいると知っていて)「この人がバヤルですか?」「いいえ、バヤルじゃないです」

4.3. 疑問文への返答文

4.3.1. ハ, すなわち主題であるケース

4.3.1.1. 疑問詞疑問文への返答文

(56) 現場におけるコピュラ文・指示形容詞を伴った普通名詞

疑問詞疑問文の場合とほぼ同様の結果であるが、č は累加であれば使えるという点が異なる。

“Ter xün xen be?” “Ter xün { Ø / *n' / ?#bol / #č / *čin' } minij bags”.

「あの人は誰ですか?」「あの人は私の先生です」

4.3.1.2. 選択疑問文への返答文

(57) 現場におけるコピュラ文・指示詞

次の文では、それほど対比のニュアンスなく bol が可能であるという。n' を用いるのは、二人以上写真に写っていて、その中でこれはバヤルかと問う場合であるという。č を用いるのは、その前の文脈ですでにバヤルの顔を知っているのだから少し変である。しかし仮装その他で顔がわかりにくければ、このような表現もあり得るという。čin' を用いた表現は、文法的には理解できるがふつうは言わないという。何度も同じ問いを訊かれてうんざりして、「おまえはバカか、これはバヤルだろ」というニュアンスを込めて言うのなら言えるという。ただし後ろに「何度も言っているだろ」という文が続く必要があるという。

“Ene Bajar uu, Baatar uu?” “Ene { Ø / n' / bol / #č / ?čin' } Bajar”.

(写真を見ながら)「これはバヤルですか、バートルですか?」「これはバヤルです」

4.3.1.3. 諾否疑問文への返答文

(58) 諾否疑問文に理由で答える場合の返答文・指示代名詞／3 人称人称代名詞

質問文の主題であり、返答文でも代名詞で承けている対象は、すでに主題であることが明確であるためであろう、n' も bol も不可と判定された。コーパスで検索すると、ter n' は 202 例、ter bol は 74 例出現するので、この組み合わせが不可であるというわけではない。

(Bajar önödör amarsan jum uu?)

Tijm ee, ter { Ø / *n' / *bol / #č / *čin' } öčigdör gemtež, emnelegt xevtsen.

(「バヤルは今日はお休みですか?」)

「はい、彼は昨日怪我して入院したんです。」

4.3.2. ガ, すなわち焦点であるケース

4.3.2.1. 疑問詞疑問文への返答文

(59) 現場における不定の人物が焦点である返答・不定代名詞

次の文では不定の人物が焦点であり、bol も č も čin' も許容されない。n' は選別のニュアンスがあれば許容される。すなわち、例えばさっきまでこの場所に何人かの人間がいたことを話し手も聞き手も知っていて、そのうちの誰かがきつとこのペンを置いていったのだろう、という時には発話可能であるという。したがって n' は選別のニュアンスを持つ時、焦点にも後続することがわかる。

(Ene xenij üzeg ve?)

Minijx biš. Magadgüj xen negen { Ø / n' / *bol / *č / *č'in' } üldeesen bajx.

(「このペンは誰の?」)

「私のじゃない。誰かが置いて行ったんじゃないか。」

4.3.2.2. 選択疑問文への返答文

(60) 選択疑問文への返答・指示形容詞と形容詞を伴った普通名詞

次の文で、n' は選別、č は累加のニュアンスがあるという。č'in' を使用しても何のニュアンスもなく使えるという。これはおそらく聞き手の提案に対する返答だからではないかと考える。bol は使えないという。これは対比の対象が考えられない文脈であるためと考える。

(Ene ulaan daašinž č gojo, ter cenxer n' bas gojo jum.)

Tijm bajna, gexdee ene cenxer daašinž { Ø / #n' / *bol / #č / č'in' } ilüü dulaaxan, ilüü gojo xaragdaž bajna.

(「この赤い服もいいし、その青い服もいいですね。」)

「そうですね、でもこの青い服の方がもっと暖かそうでもっとステキな感じでいいな。」

4.3.2.3. 諾否疑問文への返答文

(61) 現場におけるコピュラ文による諾否疑問文への返答文・指示代名詞

次の文では、唯一の対象について問い、それに答えており、選別の全体集合が存在しないため、まず n' は使えないと考えられる。bol は変ではないが、文語的な感じがするという。č は累加の意味では言えそうだが、この場合このチンゲルテイ山は一つしかないのだから、世界知識と矛盾するので変であるという。*č'in' は許容されないが、これはこのやりとりの命題を聞き手に関係づけることができないためだと考える。

(Endees Čingeltej uul xaragdax uu?)

Tijm ee, ter { Ø / *n' / ?bol / *#č / *č'in' } Čingeltej uul.

(「ここからチンゲルテイ山が見えますか?」) 「はい、あれがチンゲルテイ山です。」

4.4. 複文

4.4.1. ハが出るケース

(62) 時間の従属節を伴った願望の文・複文の主語で、同じ主語である場合

複文の主語で、同じ主語である場合、その主語は主題として文全体に係っていると考えられる。このケースでは対比や累加のニュアンスを伴った bol や č を使うことができる。bi n' が使えないことについては (15) で述べた。

Bi { Ø / *n' / #bol / #č } Japond bajx xugacaandaa xojor ögüülel bičmeer bajna.

「私は日本にいる間に論文を2つ書きたい。」

4.4.2. ガが出るケース

(63) 時間の従属節を持つ平叙文・複文の主節主語で、従属節の主語はそれとは異主語を指している場合
上記のような同主語の場合に対し、連用修飾的な複文で異主語の場合、従属節の主語にはどの対象形

式を用いることもできない。

Bajar { Ø / *n' / *bol / *čín' } namajg duudaxad bi untaž bajsan.

「私はバヤルから電話がかかってきた時まだ寝ていた。(lit. バヤルが私に電話した時, 私は寝ていた.)」

5. 結論と今後の課題

対象とその出現条件は多岐に亘り, まだ十分に整理できたとは言いがたいが, 以下に現時点での結論を述べる。いまだ仮説の段階に過ぎないと考えられるものもあるが, 今後の詳細な検討のため可能性として提示する(その場合, 「～の可能性はある」という書き方にしてある)。なおカッコ内の番号は4節の結果と分析における説明と例文の番号を示す。一部重複する記述があることもことわっておく。

5.1. 述語の種類に関する考察

- ・現場を離れた一般論の説明である場合, 対象諸形式はそれぞれの個別のニュアンスを示さず, 元来の機能はいわば互いに中和されて同じように主題を示すことができる((1)-(4))。その際の述語は恒常的なアスペクトを示す述語(コピュラ, 形容詞, 恒常・習慣形動詞形など)である。ただし čín' は一般論の説明でも命題を聞き手に関係づけようとする傾向がある((2)-(3))。
- ・これに対し, 現場における状況の説明や過去の具体的な事実の報告である場合には, 対象諸形式は個々のニュアンスを示す((7) など)
- ・一般論であっても, 現場において特定の対象について話している時には上記の中和は起こらない可能性がある((39))。
- ・現場における存現文をはじめ, 全体が新情報である文焦点の文の主語には対象諸形式は現れない((22)-(26))。
- ・疑問文の主語は, すでに疑問文の前提として話し手にとっても聞き手にとっても明確な対象であるため, あらためてさらに主題にする必要がなく, 対象諸形式は使いづらい。使うと話者に余剰な感じを与える((35))。この傾向は特に現場における諾否疑問文で強いようだ((45))。疑問文への返答文でもやはり同様のことが言える((57))。
- ・疑問詞疑問文の焦点にも対象諸形式は使えない((50))。
- ・感情述語の主語は基本的に1人称に制限されるため, 対象諸形式によって主題として取り立てることは難しいものである可能性がある((13), (34))。依頼のモダリティを持つ文でもやはり難しい可能性がある((49))。
- ・複文の主節の主語で, 従属節の主語はそれと異なる場合に, 対象諸形式は使えない可能性がある((63))。他方同主語である場合, その主語は文全体の主題であり, 対象諸形式を使うことができる((62))。
- ・対比の文では同じ対象要素を2つ使うこともできる((17))。

5.2. 名詞(項)の種類に関する考察

- ・排他の名詞項には対象諸形式は現れにくい((20)-(21))。
- ・名詞用法の形動詞形が主語である場合には n' などが必須である((40))。
- ・現場で現場指示を受ける対象が指示形容詞その他で限定され, 話し手にも聞き手にも定のものとしてよく認識されていると, Ø でも十分に主題と解釈されるため, 対象諸形式は出にくくなる。
- ・親族名称にはその所有者の人称によっては n' がつきにくくなる。これは, 親族名称が相対的に規定される名詞であり, 所有者がより必須のものとなるため, この場合には本来の起源である所有人称の性質が色濃く現れるためであると考えられる。čín' は文法化が進んでいるためかそのような制限がない((6))。

5.3. 対象形式ごとの機能の考察

5.3.1. ∅

・主題にも焦点にも文焦点の主語にも対比の名詞項にも排他的名詞項にもなる。こうした情報構造上の違いは基本的に文脈から判断されるものと考えられる。日本語でもハダカ格／無助詞の名詞項には両方の機能があるが、そのことと同じであると考えられる（名詞用法の形動詞形が主語である文以外の本稿のほとんどの文がその証拠である）。

5.3.2. n'

- ・選別をその中心的機能として持つ。選別とは同じレベルの等質のメンバーから構成される全体集合からその一つを選び出すことである ((18))。
- ・選別であれば、主題でも文焦点でも排他でも用いることができる ((27)-(28), (51), (55), (59))。つまり n' は「～の方は」の意味と「～の方が」の意味のどちらにもなり得る。
- ・名詞的用法の形動詞形が主語である場合にはこの形式が必須であり、かつその場合のデフォルトの要素である ((12), (40) など)。
- ・選別の機能を中心とするため、選択疑問文の主題にはかなり義務的に使用される ((43), (52)-(54))。n' を2つ用いた選択疑問文も許容される ((53))。
- ・条件を示す [形動詞形＋与格] に後続しない可能性がある ((11))。
- ・bi n' や čin' のように 1/2 人称代名詞に n' が後続する表現は、最近の若者言葉で使われるようになってきた表現である ((15))。

5.3.3. bol

- ・対比をその中心的機能として持つ。対比は選別と異なり、対比される対象は必ずしも同じレベルの等質なメンバーでなくともよい。さらに、対比においてはその述語の内容も対比的なものとなっている必要がある。すなわち、「A は A' だが、一方 B は B' である」のように A と B が対比されている時、A' と B' も対比的な内容である必要がある。
- ・対比であれば、主題でも文焦点でも用いることができる ((29))。

5.3.4. č

- ・ほとんどの場合、累加（～も）の意味を実現する。ただし先行する文脈が違うレベルの主語についての叙述で、累加の解釈を全く呼び起こさないものである場合には主題のように機能する可能性がある ((15))。

5.3.5. čin'

- ・話し言葉で聞き手を目の前にした状況で用いられる。独り言では用いられない。
- ・後続する名詞よりも、むしろ文の命題全体を聞き手に関係づけようとする機能を持つ ((38))。
- ・斜格名詞に対しては2人称所有の元来の起源の機能を示す可能性がある ((9) など)。
- ・待遇的・モダリティ的な含意を生じることがある ((37), (40), (57))。

5.4. 今後の課題

今回の調査例文全体の体系は十二分に統制された網羅的なものとは言えない。さらに受身、使役などのヴォイスや否定、推量、命令、勧誘など各種のモダリティ、終助詞などが示す発話内行為、さ

さまざまな種類の複文, などについていろいろと条件を変えた例文を作り, 対象形式の現れ方を体系的・網羅的に調査し分析していく必要がある。本稿の対象形式とは対立する面と共通する面を併せ持つ 1 について, さらに研究する必要がある。本稿の分析結果は一人のコンサルタントの内省を基にしているため, 今後はより多くの話者に確かめていく必要がある。

[謝辞]

丁寧な査読して下さい, たくさんの貴重なコメントを下さった 2 名の査読者の先生方にお礼申し上げます。そして何より多くの時間を割いて例文の適格性を判断して下さいとともに, 重要かつ的確なコメントをたくさんして下さいだったコンサルタントの方に深くお礼申し上げます。

参考文献

- Forker, D. (2016) Toward a typology for additive markers. *Lingua*. 180: 69-100.
- 娜仁托娅 (2011) 「モンゴル語の小辞 mini, cini, ni, cü, le, bol に関する考察：取り立ての観点から」『北方言語研究』1: 165-184.
- 野田尚史 (1985) 寺村秀夫 (企画・編集) 『日本語文法 セルフ・マスターシリーズ 1 はとが』東京：くろしお出版
- 岡田和行・向井晋一 (2006 [2016 改訂]) 「東外大言語モジュール：モンゴル語文法モジュール (取り立て [解説]) <https://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/mn/gmod/contents/card/085.html> (最終閲覧日：2023 年 12 月 10 日)
- 小沢重男 (1983) 『現代モンゴル語辞典』東京：大学書林
- 梅谷博之 (2003) 「モンゴル語の二人称所属小辞」『東京大学言語学論集』22: 209-232.

執筆者連絡先：kazamas@tufs.ac.jp

原稿受理：2023 年 12 月 31 日